

関西大学大学院外国語教育学会 NEWS VOL. 6

The Society of Kansai University Graduate School of Foreign Language Education and Research

発行日：2011.6 発行者：外教学会広報通信委員会

<CONTENTS>

- 1 はじめに
- 2 パネルディスカッション
- 3 研究発表
- 4 開発教材・カリキュラム
- 5 実践報告
- 6 討論会
- 7 基調講演
- 8 祝！博士号取得
- 9 おわりに

「外国語教育の現状と課題」という大会テーマのもと、関西大学大学院外国語教育学会第5回年次大会は、2011年3月12日（土）に関西大学千里山キャンパスにて開催されました。学会員33名、非会員18名、計51名の方々がご参加くださいました。

まず、パネルディスカッションでは、小中高大学で日本語、英語、中国語、韓国朝鮮語、スペイン語を教える実践者が抱える現状と課題が話されました。その後全体討論の中で、パネルを踏まえた意見交換がなされました。様々な言語、校種間での話し合いであったため、個々の事情に応じた具体的な議論を進展させることが難しかったですが、普段交わることのない多様な視点から課題に対する意見が交わされたことはとても有意義でした。

発表は開発教材・カリキュラムの発表が3件、実践報告が1件、研究発表が1件ありました。この5件の発表は1つの教室内で同時進行で行われました。込み入った空間での発表でありましたが、多くの参加者が熱心に耳を傾けておられたのが印象的でした。

そして、基調講演では八島智子先生より「第二言語アイデンティティと異文化コミュニケーションー社会・文化的な研究の展望ー」というテーマでお話を賜り、研究者である先生のダイアログの中で築きあげられたものと、それを実践に結びつけていこうとする強い姿勢を垣間見ることができました。

今年度の年次大会も、沢山の方々の支えのもと盛況のうちに終えることができました。5段階評価アンケートの結果、満足度や参考度は、大会全体を通しては4.29、パネルディスカッション及び討論会は3.92、研究発表は3.85そして基調講演は4.58の評価をいただきました。

本学会の会長でありご講演いただいた八島智子先生、幹事長の田尻利恵子さんをはじめ、発表者、参加者の皆様、そして大会運営にご尽力くださった多くの方々に厚く御礼申し上げます。

(中垣優子)



パネルディスカッション

発表者または講師：金恩慶先生、白濱史枝先生、須田美知子先生、谷山契先生、二宗美紀先生

コーディネーター：神道先生

記録者：竹田里香

1) 白濱先生

ブラジル・ペルー・フィリピン・アメリカのからの生徒が24人いる小学校で勤務されています。多様な子ども達のレベルとニーズに対応するのが難しい中、1：学習に参加できる日本語力、2：コミュニケーションができる日本語力、3：母語および母語文化の保持を目標に頑張っておられます。具体的な取り組みとして、学習支援の面では、生徒の意欲と自尊感情の向上を目指し、絵を挿入したり、文章を短くしたりとリライト教材を作成されたり、具体物や、実際の体験活動を通して指導されています。また、アイデンティティを育む面では、同じルーツを持つ先輩の話の聞いたり遊んだりするアミーゴタイムを設けたり、校内外の交流活動を積極的に取り入れておられます。

2) 谷山先生

谷山先生が今年受け持った3年生のクラスの最後の授業で行われたレッスンのダイジェスト版をしてくださいました。Why do you learn English?という出だしで始まり、携帯電話やテレビなどの家電業界において、日本はガラパゴス化が進んでいると言われてはいますが、そんな中、韓国が売り上げを伸ばしてきているのには理由があり、それは技術や売り込みもそうですが、ニーズをしっかりと見ているからだと言え、世界を相手にしっかり解決策を取れるようになっていこうとおっしゃいました。また、家電だけでなく、英語教育もガラパゴス化しているのではないかと、それを打開するには、まずは教師が世界的な情勢に目を向け、「無責任に夢や希望を持って、英語はこれから必要だ」と言うだけではなく、現実をしっかりと見せてから夢や希望を語るようにすべきではないかと言われました。「使命」とは「命を使う」という意味でもあり、子ども達に命を使っていくものをそれぞれ見つけて欲しいと言われていました。

3) 須田先生

中国語のクラスは全体の学校の1割くらいだと言われていましたが、1986年46校で1990年あたりから増え始め、2009年には831校で中国語のクラスがあり、全体の16%にあたります。履修者は19751人（1000人あたり5.9人）、履修形態は選択授業方式が多く、教員は500人余りとなっています。そのような中、中国語に関しては学習指導要領がなく、全体の目標は英語に準ずることになっています。須田先生が教えられている学校では、中国語の位置づけとしては手話や囲碁・将棋クラスなどと同じ位置づけの選択科目となっています。週2回2単位というのは少ないと思われています。大学への進学率が低い高校であります。AO入試や就職試験時に中国語の自己紹介ができるようにするなどの指導をされています。実際に使う場面がないと上達が進まないという観点から、優勝者には中国旅行が副賞でついたり、スピーチコンテストに出演させたり、中国語カラオケコンクールなどにも積極的に参加させておられます。

4) 二宗先生

大学で教鞭をとられていますが、生徒達の環境・目的・専門性もバラバラとなっています（専門的・トピック Study・副専攻的・選択科目として）。課題としては、共通に言えることとして、文法は身につくが語彙を増やすことは難しいということです。3年次以上は、教育実習・介護体験などで抜ける生徒が多く、授業がし難いとし、1年次はレベルは同じと思いきや英語の文法の基礎が大きくスペイン語にも関わっていて、バラツキがあったり、活用がわかっても意味がわからないし、辞書も購入しないし、使わないという課題があります。そんな中、二宗先生が取り組まれているのは、まずは、日本語で人としての絆を作ってから少しずつスペイン語で話しかけたり、個人的な質問（例えば、彼はいるの？年は？など）はスペイン語で聞いてこないと答えられないルールを作ったり、ネイティブの先生のクラスで質問をしてもらうという課題を与えたりいろんな工夫をされておられました。

10) 金先生

日本における韓国語教育と韓国における外国語教育の違いに言及され、韓国では第2外国語を2ヶ国語以上学ぶ事になっていたり、小学校から外国語教育に多くの時間が割かれています。また、民間の語学学校も早朝クラスもあり、語学に対する環境には雲泥の差があります。日本における大学での韓国語教育はというと、動機は一部を除いては必須であるから、教材も大学生向けのものではなく一般の物、教師は掲げられている目標と現実の評価に矛盾を感じていて、教室以外で韓国語を使うことも皆無である中、生徒達は韓国語に対して見た目より難しさを感じ、学習そのものが続かなくなってきました。そうした現状の中で、金先生は独自で生徒達が覚えやすいようにと文字に連想されるような絵をはめ込んだ表を作ったり、みんなが知っている歌に韓国語の音をのせたり、大学生だからそんなことはしないだろうと思っていることにも敢えて挑戦し、最近ではリズム鍵盤を持ち込んだり、いろんなチャレンジをされています。

パネルディスカッション パネラー 白濱史枝（堺市立新湊小学校）さんの感想

第5回外教学会パネルディスカッションは、パネラーという立場を越えて非常に勉強になりました。様々な言語教育に関わっていらっしゃる先生方のお話から、実践の場は違っても、課題を明確にし指導の工夫を凝らすことの大切さを学びました。今後の自分自身の実践に活かしていきたいと思います。

パネルディスカッション パネラー 谷山契（八尾市立曙川南中学校）さんの感想

当日は、未曾有の大災害により日本中が混乱を来す中、齋藤先生や八島先生をはじめ、多くの先生方、また学生の皆様に足を運んでいただきました。その光景を目の当たりにし、日本の教育はこのような先生方のご尽力により、守られ育まれてきたということを感じずにはられませんでした。

また、他のパネリストの先生方の発表を聞き、自分の置かれている英語教育という土壌が、いかに恵まれているのかということに気付くことができました。今後は、どのような土壌にあってもあきらめず、子供たちを照らし続ける太陽のような熱い思いを持った教員を目指し、頑張っていきたいと思います。

最後に、このような機会を与えていただきました、先生方、また運営に参画していただいていた諸先輩方に改めて感謝の意をお伝えしたいと思います。

本当にありがとうございました。

パネルディスカッション パネラー 須田美知子（東大阪市立日新高等学校）さんの感想

修了生でありながら、今までなんとなく敷居が高く感じていて、一度も参加したことがありませんでした。今回声をかけていただき恐る恐る参加しました。パネリストも色々な言語、校種の方が揃い、参加した自分で言うのも変ですがたいへんおもしろかったと思います。

これまで、ともすれば英語教育に押され、他言語はそっと垣根越しにその活動を覗いていたという気がします。それが同じ場所で自分の担当する言語教育の現状や課題を話し、またほかの言語のことも聞くことができたことで、パネリストもフロアの方々も私と同様の感想をお持ちになったのではないのでしょうか。

せっかくみんなの手で立ち上げたこの学会を、もっと盛んな有力なものにするために、せめて参加することで協力しようと思えたことが一番の収穫だったような気がします。ありがとうございました。

パネルディスカッション パネラー 二宗 美紀（京都外国語大学）さんの感想

教える外国語や環境が異なるディスカッションへ参加できたことは、本当に貴重な経験となり、パネラーの先生方のお話やその後のディスカッションは大変、勉強になりました。フロアの先生方からも有意義なコメントやご質問をいただき、これまでの授業を見つめなおす良い機会を与えていただいたと感じております。ありがとうございました。

パネルディスカッション パネラー 金恩慶（広島国際大学）さんの感想

小学校から大学までと様々な教育現場の先生方と一緒に外国語の教育について話し合うことができ、とても嬉しく思いました。また、英語、中国語、スペイン語、韓国語と言語は違っていても、お互いに共通できる部分、刺激し合える部分など、たくさんの方に気付かされました。学んだこと、感じたことをこれからまた現場で活かせられたらと思います。修了後もこういった研究大会を通してみなさんと交流ができることはすごく貴重な時間だと思いました。ありがとうございました。

研究発表

Oral Interview Test 再検討—誤答分析から見えてくること—

船越 貴美（神戸学院大学附属高等学校）

本発表では、同じ質問を異なる二つのテスト形式（オンラインテストと口頭試験）で実施し、評価基準をあわせて得られた採点結果と発話内容の違いを分析した結果を紹介した。同一の質問をオンラインテストの結果と、口頭試験実施時に録音した音声をスクリプトに書き起こしたものを比較した。文字を見て質問文を読んでから解答できるオンラインテストの方が、口頭試験よりも採点結果の平均点は高くなった。同じ質問でも質問文を読んで解答するほうが、音声を聞いて解答するよりも正確に答えていることを、実際の生徒の発話内容を比較しながら発表を進めた。発話内容の違いを比較することで、日本人英語学習者の音声面でも弱点が明らかになり、高校英語教育の指導の留意点が見えてきた。

参加者からは口頭試験の試験項目をどのようなものにすれば、コミュニケーション能力が発揮できるのか、という質問が出された。コミュニケーションという言葉をどのように定義するかでテストの目的が異なってくるため、指導の目的を事前に生徒にきちんと伝えておく必要があることが強調された。（船越貴美）

開発教材・カリキュラム

「英語落語—英語落語導入ユニット—」

竹田里香（関西大学大学院）

竹田さんは「英語落語ユニット」という教材開発を研究されています。小学校4，5，6年とご自身が英語教室で教えていらっしゃる幼稚園児から中学生の生徒さんを対象にした、竹田さんのまさにライフワークともいえるテーマであることがプレゼンから伝わりました。

今日は授業に生徒として参加させていただき、実際に子供たちがこのような英語授業を「小学校英語」で体験できればまさに「発信力のある」また「生きた」英語教育に大きく前進する基盤が初期英語教育の段階で実現できるのではないかと思います。

特に竹田さんは「英語落語」を通じ「表現力の育成」を研究の目的の一番に掲げていらっしゃるように実際の生徒さんたちのパフォーマンスを見せていただき、竹田さんがいかにそこに強くこだわり、さまざまな方法を駆使して指導なさっているかが「結果」として現れていました。「感動」「笑い」ありの「英語落語」でした。まさに「発信力」「双方向のコミュニケーション」がそこに実現していたからではないでしょうか。竹田さん、本日はお疲れさまでした。（古田篤子）

「モチベーションを高める授業の提案—『中国語一年生』を使って—」

明照典子（兵庫県立神戸商業高等学校）、小林和代（天理大学）、神道美映子（関西大学）

本発表では、テキスト『基本の中国語を楽しく学ぶ 中国語一年生』の編纂、背景、発音や達成目標を提示した指導例を紹介しました。

このテキストでは、既存のテキストのような形式では発音方法を説明していません。日本語と中国語の発音の違いを強調するのではなく、生徒達がこれまでに学習してきた「ローマ字読み」を利用する、単母音の具体的な指導例を挙げました。

また『中国語一年生』では文法説明も一切していません。本文では、日本の高校生の日常生活の中から「学んだらすぐに使える中国語」を取り上げています。置き換え練習でも「今言いたいことが言える」よう、身近な単語をたくさん挙げており、フラッシュカードを使い、その指導例も紹介しました。

この他、教師用の解答例集やチェックシートについても取り上げました。今後も副教材を充実させ「進化するテキスト」を実現する為に、現場の声を聞かせていただくようご協力をお願いします。（明照典子）



「学級担任のための小学校英語活動ハンドブック」

真田恵美子（豊中市教育委員会）

修了生の真田さんは、課題研究として「学級担任のための小学校英語活動ハンドブック」を開発されました。現在、豊中市と箕面市の小学校にて学級担任とのチームティーチングで外国語活動を中心に指導をされています。今回のプレゼンでは、そのハンドブックの教材作成の目的、工夫点や特徴について丁寧に説明をしていただきました。時折、ブースからの質問に答えながら進められ、現場での現状と課題についても触れていただきながら、開発されたハンドブックの改善点などについてお話していただきました。

2011年4月より、小学校では新学習指導要領が全面実施となり、外国語活動が5,6年生で年間35時間（週1時間）教科としてではなく、領域（道徳など）として教育課程に位置付けられます。その外国語活動では、学級担任が中心となって行うことが望ましいとされているにもかかわらず、地域によって差があり、真田さんのような指導員に依存してしまう学校とそうでない学校があるようです。

全面実施を目前にひかえた小学校での外国語活動（原則として英語を扱う）の現状と課題について真田さんの発表を熱心に聞き入る参加者の皆様が印象的でした。新学習指導要領実施に伴い、全教科においてよりよい子ども達の学びを考えていかなければならない現状の中で、学級担任の先生の外国語活動に対する負担が少しでも軽減できるようにという願いのもと作られたこのガイドブックが役立つと良いと思いました。

（田尻利恵子）

実践報告

英語教育に必要なものって何でしょう？—一緒に考えましょう—

谷山 契（八尾市立曙川南中学校）

谷山先生のご発表は、まず参加者に本発表の論題を考えさせ発表させることから始まり、次に「公立の中学校とは、単に英語を教えるだけでなく子どもたちを育成する場であり、子どもたちにとって親以外で一番接するのは教員である為、教員は英語以外のことも教える必要がある。」というお話があり、中3最後の授業で使用した PPT にビデオや歌などを埋め込み、ご自分で製作されたマルチメディア教材を使ってどのように授業を行ったのかというデモンストレーション、最後に質疑応答という発表構成であった。

この PPT 教材を使用した授業は、事前に 3 時間ほど教科書(Total English)の Stevie Wonder の単元について、語彙・文法・本文の訳・読みなどを学習した後に、この単元の内容を復習し、定着させることを目的に行われた。PPT には、Martin Luther King, Jr. の説明、YouTube から引用した “We Are the World” の歌などが組み込まれ、トピックが変わる時には必ず世界地図でどの国の話かを分かるよう提示した。教科書で学んだ英単語や英文を提示した時には、先生が英語で質問し、生徒に英語または日本語で答えさせ、次に日本語を提示することによって内容確認を行うなど PPT の特性を生かした構成となっていた。PPT を使うことにより、音楽、画像、文字の同時提示が可能となり、中学生にとっては非常に理解しやすいと思われた。

またアメリカでの人種差別問題に関連し、道徳の時間に学んだ日本での部落差別問題、またアフリカでの内戦や飢餓、少年兵の問題など教科を横断した内容についても写真や文字を提示しながら言及することにより、生徒に考えさせ、生徒の心に残る内容の授業構成となっていた。授業の最後に、「教科通信 13 号」というプリントが配布され、その内容は、“We Are the World” の日英の歌詞、「今回の We Are the World の授業に参加して感じたこと・思ったことを自分の言葉で読む人に伝えるように書いてください。」という感想欄、また、この 3 年生の授業を担当した谷山先生ともう一人の先生の 1 年間の授業感想文などであった。

PPT で終わるだけでなく、生徒に考えさせながら感想文を書かせることによって谷山先生が目指した「記憶に残る授業」が完成されたのではないかがわれ、活発な議論が交わされた。

（片岡晴美）

参加者全員による討論会

討論会では、まず大学院生の竹田里香さんによる英語落語“Monkey”を披露していただいた。会場が盛り上がったところで、パネルディスカッションで行われた「外国語教育の現状と課題」に対し、フロアからいくつかの質問が挙げられた。具体的質問内容としては、各言語（英語、中国語、スペイン語、韓国語）における「（言語が）できる」の位置づけをどこにおいて指導を行っているのか、文法とコミュニケーション指導のバランスをどのように配分して指導しているのか、そして、各言語における四技能（i. e., speaking, listening, reading, writing）を統合して教える工夫などであった。各言語の先生方は所属されている教育機関も多岐にわたっており、多面的なディスカッションが繰り広げられ、大変有意義な時間であった。

（植木美千子）

基調講演

「第二言語アイデンティティと異文化コミュニケーション:社会・文化的な研究の展望」

講師:八島智子 関西大学外国語学部



異文化コミュニケーションの研究をご専門の八島先生のご講演は、関大大学院で講義を受けたことがない者にも大変わかりやすく、英語教育に携わる人たちに感銘を与える内容であった。

最初にコミュニケーションの定義をし、異文化対応力としてのコミュニケーション能力について研究の背景を説明してくださった。さらに、ご自身の研究結果を紹介し、現実社会への展望へと話を進められた。海外に出て活躍したいと思っている若者が減少しているが、国内でも多文化化が進行しているので異文化対応能力が必要となることを強調しておられた。

研究編では第二言語アイデンティティについて数名の研究者の研究例を挙げながら、研究者の心のダイアログを説明された。第二言語の教育においてコミュニケーションを開始する傾向（Willingness to Communicate）がなぜ重要なのかを、ご自身の調査結果を示しながら、わかりやすく説明してくださった。最後に実践への展望を述べ、様々なレベルでのダイアログを提唱された。

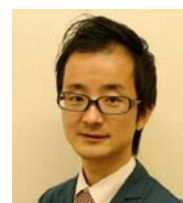
講演時間いっぱいまで話をされていたので、終了後フロアから一件の質問しか受けられなかったが、日本の英語教育が外向けの英語教育にシフトして行くことを理想とするということで、会が締めくくられた。

（船越貴美）

祝！博士号取得

学会員から3名の方が新たに博士号を取得されました。そのうち、2名の方からのメッセージをご紹介します。

研究科では、いろいろな経験をさせて頂きました。その1つひとつを積み重ねながら、博士論文を提出することができました。「場」を提供してくれた研究科に感謝すると共に、「つながり」を育ててくれた本学会に感謝しています。



(住 政二郎)

博士論文を提出することができたのは、八島先生をはじめとする研究科の先生方と友人の支えのおかげです。心から感謝しております。本研究科で培った知識と経験を基盤として、これからの人生を歩みます。最後に、本学会の益々のご発展と皆様のご健勝を心よりお祈りしております。



(西田理恵子)

<おわりに>

梅雨に入り、じめじめした毎日が続いておりますが、いかがおすごしでしょうか。ニュースレターも早いもので、第6号を発行することができました。さて、第5回研究大会では、「外国語教育の現状と課題」というテーマを掲げ、様々な言語、校種間での教育の現状と課題について議論を深めることができ、目の前の課題を明確にすること、授業に工夫を凝らすことの大切さを参加者の皆様からあらためて教えられた気がします。また、基調講演者として会長の八島先生からは、これからの外国語教育の研究と実践についての展望をお聞かせ頂き、とても勉強になりました。年度末のお忙しい中、八島先生はじめパネリストや発表された皆様にはご準備等でお時間を割いて頂き、ありがとうございました。また、ニュースレターにご寄稿して下さいました皆様にも感謝申し上げます。

【お詫び】 毎年6月に研究会を実施してまいりましたが、今年は残念ながら講師の都合により中止させて頂くことになりましたことをお詫び申し上げます。(田尻利恵子)

<編集後記>

東北地方太平洋沖震災により被災された皆様、そのご家族の方々に対しまして心よりお見舞いを申し上げます。一日も早い復旧復興をお祈り申し上げます。

震災のこともあり、花を楽しむ気分になれないまま春が過ぎ、早くも夏を迎えました。

教師という職に就いていると、春は特に新学年の始まりということもあり、バタバタしてしまいますね。NEWS LETTER第6号の発行も予定より遅くなりましたことをお詫び申し上げます。

(船越貴美・小南智恵)